

KAAT神奈川芸術劇場 芸術監督

黒沢 清 × 長塚圭史

「街と映画、街と演劇」

自身も映画好きの長塚圭史芸術監督が迎えた今回のゲストは、KAAT のご近所・馬車道にある東京藝術大学大学院の映像研究科で教鞭をと る、映画監督・黒沢清さん。映画と演劇の相違から始まり、「街を記録す る」映画の役割、表現芸術を「教える」難しさまで、幅広く興味深い対話 が縦横に展開していきます。

文=尾上そら 写真=河内 彩



まずは「つくり方」の違いについて。

黒沢 もうだいぶ前になりますけど、長塚さん、僕の映画のオーディションを受 けに来てくださったことありますよね? 2000年頃で、加瀬亮さんも一緒の時 だった記憶があるんですけれど。

長塚 加瀬さんとは同世代で、残念ながらその時は監督とのご縁はありませ んでしたが(笑)。僕も、試写会に行った先で監督をお見かけして、声をかけ たい欲望を必死に抑えたことがありました。と、いきなり話を始めてしまいま したが、今日はKAATまでお越しいただきありがとうございます。

黒沢 こちらこそ恐縮です。でも、最初は本当に僕でいいのかと思いました。 演劇は観ますが本当に観るだけで、素人です。毎回「どうやってつくっているん だろう……」と。イキウメ(劇団)の前川知大さんの戯曲を映画にさせていただ いたことがありますが、その時も「演劇と映画は全然つくり方が違う」と実感し ました。俳優たちは舞台と映像両方に関わっている方が多いので、時々こちら から聞くことがあります。「俳優にとっては、たぶん映画より演劇の方が楽しい ですよね?」と。たいていの方は、「比較しようがありません。映画はやはり監 督のものですから」とサラッと仰る。映画は他人事で、演劇で充実した創作を 経験していらっしゃるのかなぁと。

長塚 そんなことないでしょう!確かに演劇は稽古から本番まで、映像の現 場より拘束時間だけでもかなり長く、融通も利きにくいと思いますが、映像も 作品によっては長期間かかるものもあるでしょうし。今、話のなかでサラッと 「映画は監督のもの」という言葉が出ましたが、黒沢さんご自身はどう考えてい らっしゃるんですか?

黒沢 両面の意味があると思います。「失敗の責任はすべて監督にある」といる。 う義務と、「さも自分一人でつくったかのように振る舞える」という権利ですね。 アメリカなどでは、例えばアカデミー賞の作品賞をとるのはプロデューサーで、 監督には監督賞がある。「作品は誰のものか」という定義はじつは難しく、ハリ ウッドの場合は、それがプロデューサーだと明確になっている。日本はそのあ たりは曖昧でしたが、1960年代くらいから作家主義が台頭してきて、いつの 間にか「映画は監督のもの」という風になってきた。でも、著作権自体は監督 にはありません。完成したあとに宣伝のためなどで取材を受けますが、そこで 「あのカットはどうやって撮影したのですか?」と訊かれても、「たまたま映って いただけ」とか「俳優が勝手に芝居しただけ」とは言えないじゃないですか。

長塚 それは、監督が多彩な撮影法を作品のなかで試されるからでは? 黒沢 まぁ、それも映画づくりの魅力ですしね。自分では制御しきれないさま ざまな要素が混在するなかでつくり続ける。できた瞬間は、自分でもそれがな んだかわからないことも珍しくはなくて。観た人の反応で、「なるほど、そうな っていたんだ」とあとから認識できることもよくあります。でも演劇の場合は演 出家の存在は絶対でしょうし、創作・作品に対する責任も大きいですよね?

長塚 そういう前提にしておいた方が俳優さんは気が楽になるでしょうし、僕 もそのつもりでいますが、日々観客に対峙するのは俳優ですから。

黒沢 観客とじかに接する、そこが映像とは圧倒的に違うところですよね。

長塚
そうですね。だから、とにかく俳優たちにストレスがかからないように、 納得して芝居ができるよう、目的を共有するように努力します。それに僕は「こ ういう絵面が見たい」などとカッチリ決めてから創作に入るタイプではなくて。 もちろん劇場など、上演する場所の空間をどう使いたいかのイメージはありま すが、そこに入る表現や演技は稽古場で、カンパニーのみんなと一緒に考え、 つくっていきたいんです。それが自然なことだとも思いますし。

映画と演劇を往還する創作。

長塚 黒沢さんと蓮實重彦さん、青山真治監督が映画について語り尽くした 『映画長話』(リトルモア)という、ちょっと猟奇的(笑)な本がありますよね? ま ったく知らない映画人や映画の名前がボコボコ出てきて、最初は「わからない、 どうしよう……」と思うんですが、そのうちそれが気持ちよくなり、お三方の関 係性もわかってくる。そのうえで「映像は、すべてではないけれど歴史に応じた 相当数の作品が残り、今でも観ることができる」という事実が、非常に羨まし いし徹底的に演劇と違う部分だな、とも思いました。

黒沢 そのとおりです。映画は100年余りの歴史しかなく、しかもどこでどう 始まったかが比較的はっきりとわかっている。作品も、映像資料である程度は 追うことができます。一方、演劇は、知識や情報の記録はあっても現物を観る ことはできない。にもかかわらず何千年も前からある戯曲を、今この瞬間つく り手と観客が同じ空間で共有することができる。あらためて考えてみると非常 に壮大だし、その特殊性は映画とは比較にならないですね。

長塚 面白いですよね。1930年代に書かれた戯曲を、海外なんかではともす れば当時と同じ劇場で、現代の演劇人がつくり、演じるわけで。

黒沢 古代をはじめ未来も含めたあらゆる時代設定を、演劇は劇場という空 間のなかに立ち上げることができますが、映画は基本的に「今」しか撮ること はできません。セットなどつくり込むことはできても、ちょっと手を抜くと、観客 にすぐ「嘘だ」と指摘されてしまう。嘘に決まっているのに(笑)。

長塚 走っている車から着ている洋服まで、街の風景を構成する要素が10年 でも、まるで違ってしまいますよね。

黒沢 そうなんです。だから、今、何げなく作品のなかで撮っている周囲の街 並みが、じつは貴重な「記録」になる可能性が大いにある。ある時代までは(セ ットを組んでどんな撮影にも対応する)スタジオを、各映画会社が持っていた。 テレビ局もそうですよね。でも、そういう設備の維持が難しくなってしまった。

長塚 創作のための「場所」は、それがどんなジャンルであれ絶対的に必要で、 同時に確保や維持が日本ではとても難しいのが事実。近年は、ますます状況 が厳しくなっていると実感しています。ちなみにKAATでの次の作品は『蜘蛛 巣城』なんです(2023年2月25日-3月12日上演)。

黒沢 黒澤明監督の『蜘蛛巣城』(57年公開)ですか?

長塚 はい、松竹さんがすでに舞台にしているんですが、それを赤堀雅秋さんがさらに改訂し、演出も担うという。僕も出演するんですが、ちょうど今日から稽古が始まります。昨年9月には溝口健二監督の『夜の女たち』(48年公開)を

僕の演出で、ミュージカルにさせてもらったりもして。そんな、ジャンルを往還するような創作はできますよね。

黒沢 先の、イキウメ·前川さんと僕の協働も同様です。

長塚 『蜘蛛巣城』はシェイクスピアの『マクベス』 を戦国時代の日本に舞台を移し、翻案したものですから、さらに多層的な構造で創作を進めることになる。『夜の女たち』にしても、「今」新たに創作・上演するためのエネルギーは必要ですが、作品を通して「今」の立ち位置から時代や人間を俯瞰することができる、興味深い試みだと考えているんです。昭和初期のシナリオそのものが面白くて、山中貞雄監督の映画化されていない作品を、全集で読んだりもして。

黒沢 山中貞雄のシナリオを読んだことはありませんが、演劇の戯曲とはだいぶ違うものですか?

長塚 違います。展開が速いですよね、映画のシ ナリオは。

黒沢 映画の場合、一つのシーンが長いと、それがどんなに面白くとも、どんなに俳優がいい演技を見せようとも、悲しいかな5分超えると途端に退屈してくる。演劇はその場が濃密であれば一幕丸々、場面が変わらなくとも成立するじゃないですか。そこも対照的ですよね。100分くらいの映画でも普通70シーンぐらいあって、2~3分に1回はシーンが変わる、それが映画です。

長塚 ミュージカルの場合、シナリオ上で細かく割られたシーンに歌を充て、引き延ばすという逆の工夫が必要で面白かったです。

映画で街や歴史を記録する。

長塚 僕、恥ずかしながら黒沢さんが東京藝術大学大学院の映像研究科で教えていらっしゃることも、科のサテライト校舎が横浜にあることも最近まで知らなかったんです。馬車道にあるんですよね?

黒沢 ええ、だから馬車道まではしょっちゅう来るんですが、日本大通り駅にこちらの劇場があることは知らず、僕もお恥ずかしい(笑)。藝大本体がある上野を離れることで、学生たちが実習で撮影するロケ場所が横浜の街になった。 土地の傾斜、海からの距離など、自然と土地柄をすべて取り込んだ映画になっていくのは面白いですね。

長塚 演劇は稽古も上演も基本、閉じた空間のなかで行われる、野外劇などは別ですが。でも映画は、ロケでの撮影など創作過程から開かれているんですね。

黒沢 馬車道に校舎ができてから約20年。その間に生徒たちが撮影した映画のなかには、周囲の街の20年分の変化が記録されている。観返すと「あれ、あの建物もうないよね」みたいなことがあるので、たかが20年でも、街の歴史を記録するささやかな役割は果たせているのかもしれません。映画は、つくり手の意図にそぐわぬものが背景にある場合、俳優に寄ったり、見上げるようにアップにしたりすれば周囲の景観を撮らないで済む。でも僕は、それは勿体ないと思うし、僕自身の映画でも俳優と街、両者の関係性までを撮影するよう心がけています。あとから観直して初めてそこに「時代」など、意図せぬものが映っていると気づくことが多いんですが、それも楽しみなんです。

「機会」が人材育成の要。

長塚 僕、黒沢さんが教鞭をとるようになられて、2年後くらいの対談記事を 拝読したのですが、「(映画を)"教える"という行為はどこまで続くものなのか」 と疑問を呈していらした。逆に僕ら演劇の場合は、教える機関や機会が日本 ではあまりなくて。自身が現役の映画監督でいらっしゃると同時に、後進を育 てる仕事もされているというのは、ご自身のなかでどう意味づけていらっしゃ るんですか? 黒沢 じつはあまり「教えている」という実感はなくて。授業などで過去の名作を見せて「これが映画の演出というものだ」とか、実習で「ここはもっとこうした方が」などとは言います。でも学生は言うことを聞きやしないです。(長塚笑)「なんだコリャ?」って脚本を書いてきて、アドバイスしてもまったく直さず撮影し、できあがったら傑作だったなんてこともあるし。なので、「教えている」実感も効用も僕自身ピンときてはいませんが、大学の今の立場にいる以上は、「目利き」であらねばとは思っています。大学院なので、

少ない予算ながらも「この若者は、もしかしたら才能があるのではないか?」という人材を見出し、撮影・創作の機会を与えることが肝要で。そこから面白い映画を撮る学生が出てくればそれでいい。まだ何者でもない彼女・彼を見出すことが僕らの仕事の大きな部分でしょう。

長塚 才能を見出し、それらを開花させるため必要なアドバイスを与えるのが仕事だと。

黒沢 こちらから与えるというより最近は、「小さな悩み相談」的な対応が多いです。「俳優が全然言うことを聞いてくれない時はどうすれば?」とか、「カメラマンに狙いどおりに撮ってもらうための方法は?」などということに、自分の経験則で返すという。

長塚 俳優に言うことを聞かせるための方法って? 黒沢 「こうやってほしいんですが、難しいですよね?」と水を向けると、多くの俳優さんは「やってみましょう」と言ってくれます。(長塚笑)

長塚 そこから、濱口竜介監督(『偶然と想像』『ドライブ・マイ・カー』など)のような逸材も輩出されているわけで、確実に成果も出ているじゃないですか。「機会を与える」そのことが重要なのは僕も同感です。日本は演劇を志す人材に対しての「機会」が圧倒的に不足している。特に演出家や劇作家などの学びの場は、もっと増えてしかるべきだ

と思うんです。その領域にはまだ手が伸ばせていませんが、KAATでも育成に関わる取り組みをしていきたいと考えていて。その際には、ぜひお知恵をお借りできたらと思います。そして、同じ横浜拠点で活動するよしみもありますから、次回はぜひ観劇にいらしてください。

黒沢 今日たどり着けたので(笑)、次回は公演に伺えるようにします。

黒沢 清 Kiyoshi Kurosawa

映画監督。東京藝術大学大学院映像研究科映画表現技術監督領域教授。1955年、兵庫県神戸市出身。大学在学中より8mm映画を起点にした創作活動を続け、83年商業映画デビュー。『CURE』 (97)で世界的に注目される。『回路』(2001)は第54回カンヌ国際映画祭で国際映画批評家連盟賞受賞。『トウキョウソナタ』(08)でカンヌ国際映画祭ある視点部門審査員賞、『岸辺の旅』(15)では監督賞を受賞。初の海外作品『ダゲレオタイプの女』(16)などがある。『スパイの妻』(20)は第77回ヴェネツィア国際映画祭で銀獅子賞(監督賞)を受賞。21年紫綬褒章受章。

長塚圭史の思いつき

これからの新しいKAATを探るなら、そのヒントは長塚芸術監督の頭のなかにあるはず。そこで、今号制作の過程でつかんだ手応えや新しい発見について聞いてみました。

映画と演劇、そして横浜という街をテーマにした今号は、いかがでしたか。僕自身、昨年溝口健二監督の映画『夜の女たち』を基にしたミュージカルを上演したこともあり、映画と演劇の間に、映画化・演劇化という面白さがもっともっとあると思っています。今回の対談では、日本を代表する映画監督であり、東京藝術大学大学院で後進の指導をされている、黒沢清監督をお招きしました。印象的だったのは、"育成に必要なのはしかるべきタイミングでいい機会を与えることだ"というお話です。僕らKAATも、次の演劇界を担う人材を育てることが使命の一つです。それを考えていくうえでも大きな刺激になりました。

※一部コンテンツはインスタグラムや劇場ホームページ(https://www.kaat.jp)でも展開しております。ご意見・ご感想をぜひツイッター・インスタグラムに「#kaatpaper」をつけて投稿してください。



特集「横浜と映画館」

映画と街をつなげて、 横浜ならではの 体験価値を生み出す

映画と演劇は深い縁があります。KAATのある横浜は、開港以来、関内・伊勢佐木町を中心 にたくさんの映画館が立ち並び、かつては「映画の街」としても知られていました。 そこで横浜を代表するミニシアター「シネマ・ジャック&ベティ」の支配人・梶原俊幸さんに、 横浜の街と映画館がどう関わってきたのか、また映画館のこれからについて伺いました。









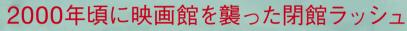




1

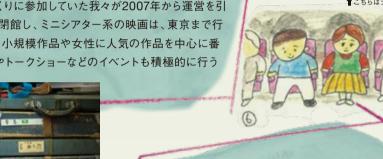
シネマ・ジャック&ベティ支配人。黄金町エリア の町おこし活動に参加したことから、2007年、 横浜シネマ・ジャック&ベティの運営を引き継ぐ。 株式会社エデュイットジャパンを設立。第68回 (2019年度)横浜文化賞文化·芸術奨励賞受賞。





シネマ・ジャック&ベティの前身「横浜名画座」は、終戦後の1952年、米軍の飛行場だった跡 地にオープンしました。1991年、老朽化した映画館を建て直して、再オープン、現在の名前に。

「シネマ・ジャック&ベティは、横浜日劇や関内アカデミーを運営していた中央興業が運営しており、 "濱の名物支配人"と呼ばれていた福寿祁久雄さんが番組編成をしていました。横浜日劇は洋画・邦画の2 本立て、ジャック&ベティでは監督特集など、映画館ごとに個性を出しながら運営していたのですが、シネ コンの台頭や時代の流れで2005年に中央興業は解体。シネマ・ジャック&ベティも一度閉館しましたが、 地元の後押しもあり、半年後に再開し、黄金町のまちづくりに参加していた我々が2007年から運営を引 き継ぐことになりました。当時、横浜の多くの映画館が閉館し、ミニシアター系の映画は、東京まで行 かないと観られない作品もありました。そこで我々は、小規模作品や女性に人気の作品を中心に番 組編成し、さらに監督や俳優を招聘して、舞台挨拶やトークショーなどのイベントも積極的に行う ようにしたんです」



↑こちらはシネマ・ベティ。定員は115席+車いす席1席。

♪かつてのチケット窓口。現在はエスカレーターを 上がった2階の窓口でチケットを販売している。



↑映写室内。現在の上映はDCP(デジタルシネマ用プロジェク

2004 (平16)年

2005 (平17) 年

2006 (平18) 年

2008 (平20) 年

2010 (平22) 年

2011 (平23) 年

2018 (平30) 年

2019 (平31) 年

2020 (令2) 年

合今では貴重になった古い映画のフィ

横浜の映画の歴史

	The state of the s
1896 (明29)年	住吉町の劇場「港座」でフランス・リュミエール社「キネマトグラフ」が公開
1908 (明41) 年	常設映画館Mパテー商会活動電気館 (のちの敷島館) 開業
1911 (明44)年	日本初の洋画封切館となるオデヲン座が開館。ここから「封切り」という言葉が生まれた
1945 (昭20)年	横浜大空襲・終戦
1947 (昭22)年	戦後初の市民劇場のマッカーサー劇場、横浜国際劇場が開業
1952 (昭27)年	横浜名画座 (のちのシネマ・ジャック&ベティ) 開業
1953 (昭28)年	横浜日劇開業
1955 (昭30)年	米軍に接収されていた旧オデヲン座が横浜松竹映画劇場として営業再開。横浜 花月映画劇場 (のちのイセザキシネマ座)、テアトル横浜 (のちの横浜ニューテアト
	ル) 開業。昭和30年代には伊勢佐木町に約40館の映画館がならび、日本で一番映画館の多い街に
1968 (昭43)年	『夜の歌謡シリーズ 伊勢佐木町ブルース』(村山新治監督) 公開
1975 (昭50)年	神奈川県民ホール開館
1980 (昭55)年	第1回ヨコハマ映画祭開催(現在まで毎年開催)
1985 (昭60)年	旧横浜松竹映画劇場のビル内に「横浜オデヲン座」オープン
1987 (昭62)年	横浜を舞台にした『あぶない刑事』公開
1988 (昭63)年	ムービル (現・109シネマズ) オープン (横浜駅西口)
1989 (平1) 年	イセザキシネマ座が「横浜シネマリン」に改称
1993 (平5) 年	第1回 フランス映画祭横浜開催
1994 (平6) 年	「私立探偵 濱マイク」 シリーズ第1作目 『我が人生最悪の時』 (林海象監督) 公開。 96年までに3本公開される
1999 (平11) 年	ワーナー・マイカル・シネマズみなとみらい (現・イオンシネマみなとみらい) 開業
2002 (平14) 年	ドラマ『私立探偵濱マイク』(日本テレビ系列)放映

関内MGA (旧・関内アカデミー) 閉館

術大学大学院映像研究科が馬車道に新設

黄金町映画祭開催 (2013年から 「横浜みなと映画祭」 に)

横浜ニューテアトル閉館。最終上映は『ヨコハマメリー』

kino cinema横浜みなとみらい開業(みなとみらい)

『ヨコハマメリー』(中村高寛監督) 公開

横浜ブルク13開業(桜木町)

KAAT 神奈川芸術劇場開館

T・ジョイ横浜オープン (横浜駅西口)

横浜日劇閉館。シネマ・ジャック&ベティが閉館し、半年後に再オープン。東京藝

映画で街を盛り上げる。 街が映画体験を面白くする

梶原さんが運営に携わり始めた当初は、客足が伸び悩むこともありました が、徐々に映画好きの間で噂になるように。再び映画館に人を呼ぶために、シ ネマ・ジャック&ベティが取り組んだことのなかには、"映画を街に出す"とい う活動もありました。

「同發新館を会場にした『横浜中華街映画祭』は、会場自体に趣があり、さ らに中国、台湾、香港などの映画を観終えて街に出ると、映画の続きのような 世界が広がっています。この体験は中華街ならではです」

2013年の「横浜みなと映画祭」では、「私立探偵濱マイク大回顧展」と銘打 ち、映画版のシリーズ3作品とドラマ版をシネマ・ジャック&ベティ、横浜シネマ リン、横浜ニューテアトルの3館で上映しました。

「映画祭のパンフレットを持ったお客さんが、映画の舞台にもなっている、イ セザキモールのなかを歩き回ったり食事したりする様子から、映画館同士が連 携することで、街も映画も盛り上げることができるんだと実感しました」

KAAT×城山羊の会『温暖化の秋 -hot autumn- | 公演時には、シネマ・ ジャック&ベティで山内ケンジ監督の『夜明けの夫婦』を上映し、公演の半券 を提示すると割引になるというキャンペーンも。トークショー開催時には、監 督と一緒にKAATから移動する方も多かったのだとか。

「今年の初めは有隣堂伊勢佐木町本店の営業終了後、店内で『ドリーミン グ村上春樹」という本にまつわる映画を上映しました。横浜はエリアごとに特 色があります。こんな風に映画と街が一体となって取り組むことで、より街の 良さや映画の面白さを感じてもらえるのではないでしょうか」

しかし、コロナ禍によって、ミニシアターは今も厳しい状態が続いています。 「ミニシアターの良さを発信するには、まず映画館自体が生き残らなくては いけません。そこで、横浜市内の小さな映画館や、映画祭・上映会団体が連 携して『横浜シネマネットワーク』というチームを組みました。また、逗子のシ ネマアミーゴや鵠沼のシネコヤなど県内の映画館と一緒に『かながわ映画部 (仮)」というネットワークを立ち上げました。さらに日本全国のミニシアター 映画館との『全国ミニシアター地域交流上映会』では、お互いの地域を舞台 にした映画の上映や意見交換を行っています。横浜は『封切り』という言葉 が生まれた場所であり、映画文化が長く根づいている場所です。これからも 街と連携しながら、横浜の映画館としてもっと映画の面白さをお伝えしてい けたらと思っています」

演劇作品が映画化されることもあれば、映画作品が舞台化されることも。ここでは、実際にKAATで上 演した、映画やその原作を基に舞台化された作品を紹介。映画・演劇それぞれの違いや魅力に迫ります。

KAAT神奈川芸術劇場プロデュース 「メトロポリス伴奏付上映会ver.2021」

進化を続ける100年前の無声映画 清水恒輔(作編曲・演奏/mama!milk)

ドイツ・ヴァイマール時代にフリッツ・ラングによって制作されたモノクロの無声映画『メ

トロポリス』(1927)。100年後のディストピア世界を描いたこの作品は、ジョルジュ・メリエスの『月世界旅行』(1902)とともに、 後世のSF映画に大きな影響を与えたといわれている。2021年にKAATで行われた伴奏付上映会は、アメリカ版の16mmフィ ルムを上映し、mama!milkの清水恒輔と生駒祐子、作曲家の阿部海太郎が作編曲したオリジナル曲を、アコーディオン、ピア ノ、コントラバスなどで演奏。そこに作家の巽勇太による自作装置の音を重ね、観客を『メトロポリス』の世界へ誘った。

「階級や資本主義、群集心理の恐ろしさなど、現代とも重なる社会の様子が描 かれており、時代を超越した面白い作品です。上映会は2009年のカナザワ映 画祭が初演でしたが、今回使用したニュープリントでは、いくつかのシーンが 復刻され、物語の描写も深度を増していました。まだ修復中のフィルムもある そうなので、この上映会も完成ではありません。2026年にこの作品が100周 年を迎えるタイミングで、ぜひ最新版の上映会ができたら」。

2021年3月20日(土・祝) - 3月21日(日) 〈中スタジオ〉 監督:フリッツ・ラング | 作編曲・演奏:阿部海太郎、生駒祐子、清水恒輔 | 装置:巽勇太



映画を舞台上で「コピー」する演劇作品 新井知行(特定非営利活動法人国際舞台芸術交流センター)

撮影=Rvo Mitamura

ある男性作家の女性差別発言を批判するため、1971年にニューヨークで開催された討 論会を記録したドキュメンタリー映画に基づく演劇作品。基づくといっても、映画の内 容を舞台向けに翻案したのではない。舞台上のモニターにその映画が流れているのが 見えていて、俳優たちが装着しているイヤホンにその音声が送られており、彼・彼女らは 映画の登場人物たちの発話と行為をリアルタイムで「完コピ」するのである。

「女性の解放についての対話」と副題がつけられ、第二波フェミニズムを象徴するともいわれるこの討論会だが、動機も思想も 微妙に異なるフェミニストたちの議論は、意図的な撹乱も含めて半ば空転し、司会を買って出た当の男性作家の露悪的饒舌に ハイジャックされる。最も注目された女性登壇者は、近年トランスジェンダーに関する差別的発言で批判されている。

出演女優の一人が企画し、女性演出家が演出したこの作品で「再演」されるのは、そうした対立、混乱、矛盾を含めた討議/闘 技の熱狂の全体である。すべての発言を理解しなくても、その全体を理解し思考することはできる。誰もが言いたいことを遠 慮なく言う様子を見ることが、こんなに面白いことだったとは。

2018年9月29日(土)-10月1日(月)〈大スタジオ〉 演出:エリザベス・ルコンプト | 出演:エンヴァー・チャカルタシュ、アリ・フリアコス、ギャレス・ホブス、グレッグ・マーテン、エリン・マリン、 スコット・シェパード、モーラ・ティアニー、ケイト・ヴァルク



撮影=Steve Gunther

企画協力:PARC-国際舞台芸術交流センタ

KAAT神奈川芸術劇場プロデュース 『華氏451度』

生の軌跡としての「書物」を紐解く 鈴木理映子(演劇ライター/編集者)

ALE MANAGERICA PLAN

書物が禁じられた未来。その取り締まり(焚書)を担う主人公、モンターグは、一人の少女と出会ったことをきっかけに、知や感性、 その集積としての本に関心を持ち始める。 レイ・ブラッドベリのSF小説『華氏451度』の映画化にあたり、フランソワ・トリュ フォーは、機械化され洗練された未来的なセットではなく、あえて現代の都市や郊外ともとれる風景を交え、メディアに侵食され 失われゆく人間性に迫った。瀟洒な戸建て住宅のリビングで、テレビスクリーンに映し出された出演者とモンターグの妻が会話 する場面は過剰なほど表層的で、シェイクスピアから映画批評誌まで、火を放たれた本が一冊ずつ表紙を黒く縮めていく場面は

あまりに痛ましい。一方、2018年に上演された白井晃演出の舞台版で は、ステージ全体を囲むような書棚が、膨大な知、人類の歴史を象徴す るものとしての存在感を示した。劇が進行し、本が燃えるたび、書棚に は空白が目立つようになり、床には乱雑に本が散らばる。SNSを通じた 思考なき反応に興じる現代の人々も、いつかはまた、それらを書架に戻 し、知の尊厳を取り戻そうとするだろうか。書物をまるごと記憶し、継承

の時を待つ、劇中の避難民「本の人々」の姿が折に触れ、思い出される。

2018年9月28日(金)-10月14日(日) 〈ホール〉 原作:レイ・ブラッドベリ | 上演台本:長塚圭史 | 演出:白井晃 | 音楽:種子田郷 出演:吉沢悠、美波、堀部圭亮、粟野史浩、土井ケイト、草村礼子、吹越満

KAAT神奈川芸術劇場プロデュース ミュージカル『夜の女たち』

S. LAA. B.-W. S.-

戦後は新たな戦いの始まりだった

長塚圭史(上演台本·演出/KAAT神奈川芸術劇場 芸術監督)

戦後間もない1948年に公開された映画『夜の女たち』。 昨年、74年の時を経て、長塚圭史によ る上演台本・演出、音楽を荻野清子が手がけたオリジナルミュージカルとして上演された。 「溝口健二監督の映画には、戦後日本の風景がありました。戦時中の統制下の厳しい暮らしと 過酷なまでの戦闘を生き抜き、終戦を境に圧倒的に変化する社会。さらなる貧困。路上に立 たねばならなかった女性たちの姿は、ドキュメンタリーのように迫りくるものがありました」 映画からミュージカルにするために、当時の膨大な資料から物語に肉づけをしていった。

「映画は戦後間もなくの上映で、観客と時代を共有できていたため、劇中で詳しい説明はなされていません。また男性についても 詳細は描かれていませんでしたが、ミュージカルでは、終戦を境にアイデンティティーを失った男たちの姿も描こうと考えました。 物語の中心となる3人の女たちに対峙する男たちはどんな人物だったのか。当時について調べるほど、僕らは戦争について何も 知らないのだと痛感しました。戦後というのは、庶民にとっては新たな戦いの始まりでもあった。折しも上演の準備をしている最 中にロシアによるウクライナ侵攻が始まり、この物語は過去のものではないと強く感じました」

2022年9月9日(金) - 9月19日(月・祝) 〈ホール〉

<u>@</u>

原作:久板栄二郎 | 映画脚本:依田義賢 | 上演台本・演出:長塚圭史 | 音楽:荻野清子 出演:江口のりこ、前田敦子/伊原六花、前田旺志郎、北村岳子、福田転球/大東駿介、北村有起哉 ほか

撮影=細野晋司



REVIEW

KAAT古典芸能シリーズ つたえつなぐ

舞囃子『高砂』八段之舞 義太夫『源氏烏帽子折 伏見の里の段』

2022年10月15日(土) KAAT神奈川芸術劇場〈中スタジオ〉

性別を超える声・身体

文=高橋彩子(演劇・舞踊ライター)

古来、女性はさまざまな芸能で大きな役割を果たしてきた。その一方で、時代によって表舞台から遠ざけられたケースも少なくない。今も歌舞伎の世界で成人女性が表舞台に立つことは基本的にないし、能や義太夫節には現在、女性の演者もいるが、根本的には男性中心に発展した芸能であり、女性の演者の修業には男性以上に大きな負荷がかかる。だからこそ今回、KAATの古典芸能シリーズの第1回に、ともにそのジャンルにおける女性の存在を知らしめ、可能性を広げてきた人物である、女流義太夫人

【舞囃子】 『高砂』八段之舞 シテ住吉明神: 鵜澤久 (観世流シテ方能楽師)

笛:八反田 智子 小鼓:飯田 清一 大鼓:大倉 慶乃助 太鼓:林 雄一郎 地謡:長山 桂三、谷本 健吾、

【義太夫】

『源氏烏帽子折 伏見の里の段』 太夫:竹本駒之助

鵜澤 光、安藤 貴康

(女流義太夫 人間国宝) 三味線:鶴澤津賀花

【解説】:日置貴之(明治大学准教授)

間国宝の竹本駒之助と観世流シテ方能楽師の鵜澤久が登場したことの意味は大きい。

まず、鵜澤久の舞囃子『高砂』。シテの住吉明神が若い神の姿で舞う。久の鍛え上げられ制御された身体の揺るぎな



い存在感、颯爽として気迫がみなぎる所作、そして、狭義の女性性を削ぎ落とした深みのある声。この声と性別は、竹本駒之助の義太夫『源氏烏帽子折 伏見の里の段』でも大きな特長となる。雪が降りしきるなか、3人の幼子を連れて平家から逃れる常盤御前が一夜の宿を乞うた家の女房白妙は源氏方の武士の妹、その夫は平家の侍・弥平兵衛宗清であったという物語。駒之助の語りは、常盤御前と白妙では女性の弱さ、優しさ、芯の強さが、牛若らでは子どもの健気さが表現される一方、宗清ではその深慮や豪胆さが男性

撮影=引地信彦 的に描写され、幕切れに向けてドラマティックに疾走する。

持って生まれたものが如実に現れるのが声であり、オペラならば声質によって役が決まるほど。しかし能にしろ義太夫にしろ、男性ですら苦労しながらつくり上げる特有の声を、女性の身でつくっていかなければならない。駒之助も久もたゆまぬ修業の末にこれを成し遂げたことが、今回あらためて示されたといえるだろう。

『高砂』は能の代表的な祝言曲であり、『源氏鳥帽子折 伏見の里の段』もその後の源氏の興隆を寿ぐめでたい演目。そこに伝統芸能の未来への想いを見るようだった。

KAAT×城山羊の会

『温暖化の秋 -hot autumn-』

2022年11月13日(日) — 11月27日(日) KAAT神奈川芸術劇場〈大スタジオ〉

林檎は何処からきたのか

文=渡辺紘文(映画監督/俳優)

小さな丘。上手から下手へ抜ける道。点在する小さな樹木の切り株。奇妙なほど何処か空虚で無機質で閑散とした灰色の舞台。その天井からは一つの赤い林檎が吊るされている。とても不穏。何か素敵な出来事がこれから起きる予感がまったくしない。いや、きっとろくなことが起きない。

舞台の上手から若い男女二人が何げない会話をしながら歩いてくる。二人のうち一人はマスクをしていて一人はしていない。二人は天井から吊るされた林檎にすぐに気がつく。若い女が林檎を食べたいと言うと若い男は林檎を女のために取ってあげようとする。

ジャンプする男。林檎は絶妙な位置に浮かんでいて男の手の先に触れはするが届くことはない。男は無様に転倒する。女は転倒した男を素敵だったと褒める。男は立ち上がり、女のために再び林檎を取ろうとする。するとどうだろう。林檎は先ほどの位置より随分高い位置に移動している。

なぜだ。何が起きた。異常だ。理解不能だ。頭が混乱する。恐ろしい。

若い二人がもぎり取り、食べようとしていた天井から吊るされていた赤い実は林檎なのか、禁断の果実なのか、神からの啓示なのか、悪魔の誘惑なのか。この小さなエピソードーって、もう十分これから始まる地獄絵図の一端を見せられたような気がする。

温暖化で暑い秋というものが異常な季節なのだということを。 自分たちが笑って見ているものは今現在を生きる自分たち自身の姿であり、自分たちが生きている現実、国家、社会、世界という名の地獄なのだということを。



作・演出:山内ケンジ 出演:趣里、橋本淳、

> 岡部たかし、岩谷健司、 東野絢香、笠島智、じろう(シソンヌ)

撮影=益永葉

『スカパン』

2022年10月26日(水) — 10月30日(日) KAAT神奈川芸術劇場〈大スタジオ〉

終わることのないKの冒険

文=加藤 直(演出·劇作)

原作:モリエール 『スカパンの悪巧み』 訳:内藤俊人 潤色・美術・演出:串田和美 出演:串田和美、大森博史、 武居卓、小日向星一、 串田十二夜、皆本麻帆、 湯川ひな、細川貴司、 下地尚子 / 小日向文世

ピカソのキュビズムもまた十分演劇表現に刺激を与えたはずだ。なぜなら人物や世界をさまざまな視点から見ると、別の人物や見知らぬ世界がすぐそこに存在していることに気づくかもしれないのだから。

Kの『スカバン』は、公演を改めるたびにまるで逃げる「劇場」を追いかけるようにドタバタと走り、ついでにその時の現在や世の中を痛烈に笑い飛ばし、時に罵倒してきた。今回の演出もこのご時世だ。闇雲に装うかの過剰さは、いっそう観客の尻をもぞもぞ落ち着かせず面白い。シェイクスピアやモリエールに影響を及ぼしたコメディア・デラルテや韓国の仮面劇タルチュムから何百年も経つというのに、Kの『スカパン』は仮面も被らずに奔放で破壊的なまでに笑いに迫る。このスラップスティック喜劇は「ダダイズム」を思い起こさせるぞ。そうか。彼の登場人物はそれで皆、この世界をわかりやすく一つにまとめ、さらに記号や数字にしようとするすべてを、蹴散らかそうと「ダダ・ダダ」と転ぶのだ。

そういえば、アンドレ・ブルトンたちが『シュルレアリスム宣言』を書いて、じき百年になる。それと前後して各国に出現した表現の冒険たちは今どこにいるのだろうか? ダダやピカソのキュビズム やロシア・アヴァンギャルド、ドイツ表現主義や未来派は? どれもが「リアリズム」を目の敵としな

がらも、その片鱗を忍ばせて冒険の旅に出て、いつの間にか姿を消した。結局この百年の表現は人々から「リアル」を奪う道程だったという訳か?

そこでKは行方不明の冒険者たちの二の 舞はゴメン、遊行するトリックスターなら そこかしこ かくやとばかり観客と出会う其処彼処を たちまち劇場にする旅を続けるのだな。 Kとは勿論、串田和美さんのことです。



撮影=山田毅

<KAAT神奈川芸術劇場プロデュース>

2022年11月30日(水) — 12月4日(日) KAAT神奈川芸術劇場〈中スタジオ〉

『ライカムで待っとく』

バックヤードに思いを寄せて

文=きゃんひとみ(パーソナリティ/女優)

作:兼島拓也 演出:田中麻衣子

出演: 亀田佳明、前田一世、南里双六、蔵下穂波、 小川ゲン、神田青、魏涼子、あめくみちこ

1960年アメリカ統治下のなか、私は沖縄に生まれた。当たり前のように基地があり上空には米軍ヘリが。 父のアメ車に乗りながら沖縄の歌を妹弟と口ずさみ、キスチョコを頬張る。 週末には父の家族サービスで お決まりのアメリカ人専用のレストランでフィレミニョンステーキを食べる。何のためらいもなく楽しく幸 せな時間が流れていると思っている子どもの頃。父母は戦争の話をほとんどしない。子ども心に聞いて はいけないのだと。『ライカムで待っとく』の舞台を観て「沖縄の物語」はバックヤードでは数えきれない ほどのつらい事件事故が「無かったことに」されている。きっと「無かったことに」した方が生きやすいか ら…と、胸を裂かれる衝撃が走った! そっか私たちは「無かったことに」「忘れたことに」することで生き てきた。「寄り添う」という言葉がとても軽はずみに聞こえてきた。私たちの物語は「沖縄と日本とアメリ カ」の境界線をなくすのではなく、水平線で果てしなくどこまでも続く終わりのない旅路なのだと感じ た。ウチナーンチュの魂は、マブイは、ずっとあの日からさまよい続けているのだと。帰り道思わず涙が 込み上げてきた。もう無かったことにしてはいけない!! あめくみちこさんのユタ登場で思わず笑って しまった。沖縄では「あるある話」だから。「医者よりユタに行った方がいい」と。沖縄には摩訶不思議 なことがたくさんある。あめくさんとは朝ドラ『ちむどんどん』で、おばぁ役で共演させてもらっていて、 とても心強い存在でした。思わず「さすが!」と声を出しそうになったくらい素晴らしかったです。『ラ イカムで待っとく』は、沖縄を伝える新しい表現。苦しくて重たくなりがちな闇の沖縄を、笑いを取り入 れてサラッとかわしていく。でも心に刺さる言葉の数々。まだ30代の沖縄の若手劇作家、兼島拓也さ

ん。そして沖縄に出自をもつ演出家、田中麻 衣子さん。きっとお二人のバックヤードにも 長い時間をかけて話し合われた物語がある ことでしょう。私はそれを知りたくてたまら ない。そしてもう一度あの舞台が観たい! この琉歌で最後の言葉とします。「いちぬ 世になていん肝うちゅる涙や黄金玉ぬぐ とう心美らさ」(いつの世もどこにいても心 うつ涙を流せる人は魂の美しい人)。



撮影=引地信彦

『横浜国際舞台芸術ミーティング2022

(YPAM2022) J 2022年12月1日(木) — 12月18日(日)

KAAT神奈川芸術劇場 〈ホール・大スタジオ・中スタジオ〉

暗やみと月の祀り

文=高橋宏幸(演劇評論家)

ブラレヤン・ダンスカンパニー(台湾)『LUNA』

CINARSショーケース シアター・ジャンクション(カナダ) 『カオスモス:脱植民地化されたキャバレー』

オル太(日本)『ニッポン・イデオロギー(仮)』 ※新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響により公 演を中止、映像を中心とした上演に変更

ヤン・ジェン(中国)『ジャスミンタウン』

「横浜国際舞台芸術ミーティング2022」(YPAM2022)が開催された。ミーティングはもち ろん、さまざまな企画の一つとして、ディレクションと呼ばれる招聘や共同で制作をした作 品の上演がある。

東南アジアや東アジア地域をはじめ、世界各地に目くばりされている。例えば、マレーシア のファイブアーツセンターの『仮構の歴史』は、国家がつくる歴史の創作過程を追い、オル 太の『ニッポン・イデオロギー(仮)』は、近代日本がつくった日本的なイデオロギーを問う。 ヤン・ジェンの『ジャスミンタウン』は、横浜の中華街に住む華僑・華人のアイデンティティー や文化の多様性を実際に、その街に住む人々を舞台に登場させて描いた。

そして、オープニングを飾った台湾のブラレヤン・ダンスカンパニーの『LUNA』。台湾の先 住民族であるブヌン族の儀式や祭祀、彼らの身振りともいえるしぐさや動きをコンテンポラ リーダンスへと昇華した。

舞台を始終覆っている薄暗い色調は、 まるで深い夜のようだ。そこに一筋の 月明かりのように、常に上辺の片隅は 照らされる。そして響きわたるのは、自 身を鼓舞するような高らかな一斉のか け声や動き、そして音楽であり、動きは 違うけれど、マオリ族のハカを彷彿と させるような、独特な民族舞踊から触



発された力強いダンスがある。単に踊りを見せるだけではない。時にユーモアをたたえた 会話が入れ込まれて、それは先住民族の文化と現代社会との対話となる。深い夜がもつ神 秘性を秘めた空間のなかで、祀りや祈りが、現代性をおびたコンテンポラリーダンスとなる。 背景には台湾を形づくる複数の民族性、文化の重層性、マイノリティーとマジョリティーの 複雑性が埋め込まれているのだろうか。それらに思いを馳せながら、現代の台湾の文化と して踊る身体を透かして見る作品だ。

KAAT DANCE SERIES

『星の王子さま サン=テグジュペリからの手紙』

2023年1月21日(土) — 1月29日(日) KAAT神奈川芸術劇場〈ホール〉

大切なものは 耳にも聞こえない

文=古川実利

(特定非営利活動法人 神奈川県中途失聴·難聴者協会副理事長) 演出·振付·出演:森山開次

美術:日比野克彦 衣裳:ひびのこづえ

音楽:阿部海太郎

出演:森山開次、アオイヤマダ、小尻健太、 酒井はな、島地保武/坂本美雨 浅沼圭、五十嵐結也、池田美佳、 薄田真美子、川合ロン、水島晃太郎、

南帆乃佳 演奏:佐藤公哉、中村大史

私は大人になってから耳が聞こえづらくなり、演劇鑑賞と無縁になった(ように思えた)。 だが、『星の王子さま サン=テグジュペリからの手紙』の公演に、ヒアリングループ(難聴者 の聞こえを支援する装置で、マイクの音を磁気に換え、補聴器や人工内耳で直接聞く)が設 置されると知り、観劇してみたくなった。KAATの螺旋状に昇っていくエスカレーターは、 異世界の入り口へ向かうような感覚にさせた。満員の客席では、目をきらきらさせた観客

が開演を待っていたが、私は果たして 聞こえるのだろうか?と心配していた。 ただ、その心配も杞憂に終わり、さま ざまな楽器による音楽がはっきりと間 こえてきた。言葉によらない歌声も。 それが私を励ましてくれる。舞台上で は、風が吹き、渡り鳥が飛び回り、飛 行士は不思議なペンとメモ帳で何か を書き綴る。バラが踊り、蛇が絡みつ



き、バオバブが蠢いている。すべてを身体等で表現しており、音声による台詞はない。話 の筋を知らない人は観ていて楽しめるのだろうか?という思いが頭をよぎった。そう、この 演劇には「こうあるべきだ」という固定観念や常識を打ち壊そうとする固い意志が、ダン ス、音楽、美術、衣装、すべてに表れていた。それこそがこの作品の根底に流れる作者の 想いなのだと。いろいろな鑑賞方法、感じ方、考え方があってもよいのではないか?大切 なものは目に見えないし、耳にも聞こえない。心で見て、心で聞かないとね、と言われてい る気がした。観客それぞれが心のなかに立ち上げた物語は、最後はみんなつながってい るのだという感覚を残した。星の王子さまが感じている孤独は私たちの孤独でもあった から。その証拠に万雷の拍手で幕は閉じた。ヒアリングループにより、このような貴重な 「出会い」を与えてくれたKAATのスタッフをはじめとする皆様に大変感謝している。そして また、次の異世界へ連れて行ってくれることを願っている。

神奈川へ、会いに〈関内まちづくり振興会〉

長塚芸術監督が、今、気になっている街の人にふらっと会いに出かけます。 第6回は、横浜スタジアムを中心にオフィス街と繁華街が立ち並ぶ関内に、 〈関内まちづくり振興会〉の理事長・秋山修一さんを訪ねました。



長塚 すごく初歩的な質問で恐縮なのですが、「関内 | は横浜を代表する街の一つですが、実際は どこからどこまでを指すんでしょうか。

秋山 行政上の「関内地区」というのは、じつは桜木町から元町までの広いエリアです。

長塚 ということは、KAATも関内になりますか。

秋山 そうなりますね。ただ、地元横浜の人にとっては、横浜スタジアムから馬車道の手前あた り、関内駅から本町通りまでのあたりを思い浮かべると思います。我々は「セントラル関内」と 言って、もう少し狭めたところを重点にまちづくりを行っています。

長塚 今日はKAATから歩いてこちらに伺いましたが、いろいろなお店が立ち並んでいて、眺め るだけでも楽しかった。近々、ぜひ立ち寄りたいと思います。

秋山 食事というと横浜・元町中華街のイメージがあるかもしれませんが、関内には個人のオー ナーが経営している個性的なお店が多く、夜に飲み直すバーもあったりして、大人が安心して遊べ る街なんです。コロナ禍によってにぎわいが薄れた時期もありましたが、関内はたくさんのホテル があって、宿泊療養施設になったところもあったんです。地元のお店がつくったお弁当を提供した こともありました。コロナの療養とはいえ関内を訪れてくれた人を地元は歓迎したいですから。 元々、関内はいろんなお店がお弁当を販売していた激戦区だったので、いち早く対応することがで きたんです。だから、療養の方々にいち早く最高のおもてなしをすることができました。

長塚 舞台中や稽古でもお弁当を頼むことが多いので、僕らにとってもうれしい情報です。 関 内は横浜スタジアムもすぐそばですが、観戦帰りのお客さんも多いのではないでしょうか。

秋山 「ベイスターズ通り」と呼ばれる通りがあったり、そこの商店街に加盟しているお店には チームのステッカーが貼ってあったりと街ぐるみで応援しています。試合に勝つと、街がユニ フォーム姿のお客さんであふれますよ。KAATのあたりはベイスターズの影響はありますか。

長塚 今はまだ。本心をいうと、ベイスターズのユニフォームを着た方々にも、劇場に来てほしい と思ってるんです。いろいろな方に気軽に来ていただきたくて、子ども向けの演劇やダンスのプロ グラムなどいろんな企画を考えています。こちらでも、さまざまな催しを企画されていますね。

秋山 春に「関内フード&ハイカラフェスタ~さくらまつり~」を予定しています。毎年秋の「関 内フード&ハイカラフェスタ」は、「馬車道まつり」と日程を合わせて、会場の弁天通を馬車道と 連結させて、来場者が回遊できるようにしています。前回は、関内を拠点にするプロレスラーの 佐藤光留選手などが路上プロレスを披露してくれました。路上プロレスは、弁天通の全体を使い ます。元々プロレスファンの人もいれば、何かやってるぞと足を止めてくれる人もいて、300人 ぐらいの観客で盛り上がりました。

長塚楽しそうですね。僕らも何かご一緒できることがありそうです。

散歩がてら歩いて来られる距離ですから。一緒に街を盛り上げていきましょう。



2023年度ラインアップ発表!

今年のメインシーズンタイトルは「貌」に。

2月7日、2023年度ラインアップ発表会が行われ ました。長塚芸術監督が就任してから今年で3年目。 KAATではシーズン制を導入しており、初年度のシー ズンタイトルは「盲」、昨年は「忘」。そして今年度は、 「貌」と発表されました。

「2023年度のKAATメインシーズンタイトルは、 『貌』。かたちと読みます。目に見えるかたち、触れ て確かめるかたち、聞こえてくるかたち……。今年 のKAATは、さまざまな角度から貌を見つめていき



撮影=加藤 甫

ます。私たちはどのように物事のかたちを捉え、どう向き合っていくのか、年間を通して思考してい きたいと考えています」と長塚芸術監督。

また、アーティストと一緒にクリエーションのアイディアを創造するプロジェクト「カイハツ」もより いっそう推し進め、昨年好評をいただいた神奈川県内をめぐる「カナガワ・ツアー・プロジェクト」も 予定されています。「劇場文化をより広くお客さまに届けられるような1年にしていきたい」と語りま した。プレシーズンは、5月『虹む街の果て』から、メインシーズンは、9月「KAAT EXHIBITION 2023」からスタート。今年もアートやダンス、演劇など、多種多様な公演が目白押しです。

公式YouTubeチャンネルで公開中!



ラインアップチラシWEB版はこち らからダウンロードいただけます。



ラインアップ発表会の様子は、KAAT

『虹む街の果て』

(中スタジオ)

チケット発売中

作・演出:タニノクロウ

KAAT神奈川芸術劇場プロデュース

出演:渡辺庸介(パーカッショニスト)、赤星満

阿字一郎、アリソン・オパオン、小澤りか、

音と音楽、多様性に満ちたあの街の果て。

『虹む街』が再びKAATに現れる!

タニノクロウと神奈川県民で創る、

クロウが、その街の未来を描く。

『さいごの1つ前』

KAATキッズ・プログラム 2023

7月21日(金) - 24日(月) (大スタジオ)

出演:白石加代子、久保井研、薬丸翔、湯川ひな

5/27(土)一般発売 5/25(木)KAme先行

「わたしたち、これからどこに行くの?」

5月13日(土)、14日(日)、20日(土)、21日(日)

ジョセフィン・森、馬双喜 ほか、神奈川県民を中心とした街の人たち

2021年、寡黙劇として上演した『虹む街』。演劇界の鬼才タニノ

KAATキッズ・プログラム 2023

出演:川合ロン、Aokid、岡本優、石川朝日

5/27(土)一般発売 5/25(木)KAme先行

『さかさまの世界』

振付・構成・演出: 伊藤郁女

4歳から150歳向けダンス作品。

さかさまになった世界を救うカギは、

(大スタジオ)

7月1日(土)、2日(日)、8日(土)、9日(日)







The Union Bar & Lounge

そこで出演者やアーティスト、スタッフが足しげく通う、



ハイアット リージェンシー 横浜は、2020年にオープンした横浜初のハ イアットホテルです。観劇の前後の食事やお茶、一泊してゆったりと街 を観光したりするのにもぴったりです。KAATスタッフがちょっと贅沢す る時にいただくのが、「ザ・ユニオンバー&ラウンジ」の「本日のデザー ト」。春は大粒イチゴのコンポートと白ワインが香るジュレに、濃厚なバ ニラアイスクリームを合わせた本格的なデセール*です。紅茶やコー ヒー、シャンパンやワインとのマリアージュも楽しめます。クリスタルシャ ンデリア「ヨコハマムーンライト」が美しい開放感あふれる空間で観劇 の感想を語らう、豊かな時間を過ごしてみては。

The Union Bar & Lounge (ザ・ユニオンバー&ラウンジ)

〒231-8340 神奈川県横浜市中区山下町280-2 ハイアット リージェンシー 横浜1F **2**045-222-0121 (10:00~19:00)

営業時間 11:00~22:30(L.O. フード 21:00、ドリンク 22:00)、

十曜日 11:00~23:00(L.O.フード 21:00、ドリンク 22:30)

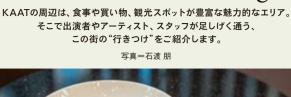
アフタヌーンティー 12:00~17:00

(最終入店 15:00 ※前日18:00までに予約が必要) 「本日のデザート」の提供時間は17:00~閉店まで

URL:hyattregencyyokohama.com

神奈川県民ホール

※デセール・・・フランス料理のコースの最後に提供されるデザートのこと。



子どもたちのイマジネーション! 欧州で活動するダンサー・伊藤郁女が子どもたちの想像力を もとにフランスで創った作品を日本で新たに上演。 KAATキッズ・プログラム 2023

『くるみ割り人形外伝』 「本日のデザート」1,200円(税込) ※「イチゴのフレッシュコンボートとパニラアイスクリーム」の提供期間は5月31日まで。 8月上旬ー中旬 (大スタジオ)

歌あり、踊りあり、お芝居の魅力満載の音楽劇! 天国と地獄の分かれ道で、なくした記憶を探すおしばい。 引っ込み思案な少女が、大好きな人形とともに一夜の冒険を 作・演出 松井周×主演 白石加代子というキッズ・プログラムと くり広げ、大切なものを見つけるオリジナルストーリー。 しては異色の顔合わせで好評を博した本作が、待望の再演!

作・演出:根本宗子

音楽:小春(チャラン・ポ・ランタン)

5/27(土)一般発売 5/25(木)KAme先行

バレエ『くるみ割り人形』をベースに創作する、

KAATキッズ・プログラム

KAAT キッズ・プログラム 2023 3作品セット券発売!

『さかさまの世界』『さいごの1つ前』『くるみ 割り人形外伝』の3作品を通しでご覧いただ ける特典付きセット券を、各作品のKAme 先行に先駆けて販売します。詳細は、決定 次第、劇場HPにてお知らせします。 セット券発売:5月20日(土)

〈チケット取り扱い・お問い合わせ〉 チケットかながわ 0570-015-415(10:00~18:00)

提携公演

5-6月 木ノ下歌舞伎『糸井版 摂州合邦辻』

(4月) 仕立て屋のサーカス 横浜公演 https://www.kaat.jp/d/circo2023 (6月) OrganWorks2023 「漂幻する駝鳥/to water station』

https://www.kaat.jp/d/bgm2023 (7-8月) 範宙遊泳『バナナの花は食べられる』

	KAAT	公演スケジュール 2023 SPRING-SUMMER	
4月20日 🚯 - 4月23日 📵		TAK in KAAT 虹の素『雨上がりには好きだといって』	【大スタジオ】
4月25日 👁 - 7月22日 🕀		劇団四季 ミュージカル『クレイジー・フォー・ユー』	ホール
4月28日 🍪 - 4月30日 📵		仕立て屋のサーカス 横浜公演	大スタジオ
5月5日 🚳 - 5月10日 🚳		ロロ本公演『BGM』	大スタジオ
5月13日 🕕 - 5月21日 📵		KAAT神奈川芸術劇場プロデュース『虹む街の果て』	中スタジオ
5月26日 🍪 - 6月4日 📵		木ノ下歌舞伎『糸井版 摂州合邦辻』	大スタジオ
6月3日 🕕 - 6月11日 📵		OrganWorks2023『漂幻する駝鳥/to water station』	中スタジオ
6月17日 🖶 - 6月18日 📵		Dance Company Lasta New Work 2023 ROOM	大スタジオ
6月22日 🚯 - 6月23日 🚳		舞台技術講座	大スタジオ
7月1日 🕀 - 7月9日 📵		KAATキッズ・プログラム 2023『さかさまの世界』	大スタジオ
7月21日 🍪 - 7月24日 📵		KAATキッズ・プログラム 2023『さいごの1つ前』	大スタジオ
7月28日 🍪 -8月6日 📵		範宙遊泳『バナナの花は食べられる』	中スタジオ
8月1日 🕸 - 8月8日 🕸		宝塚歌劇宙組 ミュージカル・ロマン『大逆転裁判』一新・蘇る真実一	ホール
8月上旬-8月中旬		KAATキッズ・プログラム 2023『くるみ割り人形外伝』	大スタジオ
8月20日 📵		KAATフレンドシッププログラム『みんなのKAAT バックステージツアー』	ホール
8月24日 🚯 - 8月27日 📵		TAK in KAAT 螺旋階段『血の底』	大スタジオ
 300 PRI + 0 1 0 0 0 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1		4	

※情報は3月30日現在のものです。変更となる場合がございます。予めご了承ください。詳細は、各公演のウェブサイトをご確認ください。

KAAT 神奈川芸術劇場

〒231-0023 神奈川県横浜市中区山下町281 TEL.045-633-6500(代表) FAX.045-681-1691 https://www.kaat.jp

- みなとみらい線:渋谷駅から東横線直通で35分!横浜駅から6分! 日本大通り駅から徒歩約5分。元町・中華街駅から徒歩約8分。
- JR根岸線:関内駅または石川町駅から徒歩14分。
- 市営地下鉄:関内駅から徒歩14分。
- 市営バス:芸術劇場・NHK前すぐ。

横浜駅前東口バスターミナル 2番のりば乗車(所要時間約25分) 桜木町駅前バスターミナル 2番のりば乗車(所要時間約10分) ※上記のりばから発車するバスはすべて「芸術劇場・NHK前」を通ります。 ただし、148系統急行線を除く。

● 神奈川芸術劇場有料駐車場(65台)もご利用ください。 指定管理者:(公財)神奈川芸術文化財団

KAAT PAPER 読者アンケート

今後の誌面づくりに活かすため、皆さまのご意見・ ご感想をぜひお寄せください。アンケートにご回 答いただいた方のなかから抽選で、1組2名様に KAATキッズ・プログラム 2023『さかさまの世界』(振付・構成・演出:

プレゼントいたします。 ※チケットプレゼント応募期限:2023年5月31日(水) ※厳選なる抽選のう え、当選者の発表はメールでのご連絡をもって代えさせていただきます。

伊藤郁女/ご招待日:2023年7月2日(日)14:00開演の回)のチケットを



木黄浜港

横浜マリンタワ・

೬刊誌 神奈川芸術劇場 KAAT PAPER 春号(年3回発行)

2023年4月7日発行

発行=KAAT神奈川芸術劇場

編集=伊藤総研株式会社、松田美保

編集協力=株式会社ボイズ